

□ 書評 □

松井俊雄(著)

[生き生きケア選書]

老いのスケッチー痴呆性老人とデイサービス

“関係障害”としての痴呆を描く ケアエッセイ

三好春樹

(生活とリハビリ研究所)

齢をとれば誰でも呆ける。目がうすくなるのと同じように物忘れをし、耳が遠くなるのと同じに尿道括約筋がゆるんでお漏らしをする。問題が生じるとしたら、そうした、老いという自然過程とうまく付き合っていないことからではないか。近代社会が、そして核化した家族が、

また、呆け老人、時々引き起こす激しい問題行動は、そうした、物忘れをし、お漏らしをする自分に、当の自分自身が付き合えないという、“関係障害”によるのではあるまいか。これが私の現場から作り上げた痴呆論である。

ところが社会の側は、呆けを老いに伴う自然ではなく、一時的で回復可能な疾病であると思いたがった。そうすることで、老いに適応できない社会の問題を直視しないで済むからである。

医療の側も近代医療で治癒可能であるかのように思いこもうとした。呆けを「アルツハイマー型痴呆」と言い、少しずつ「アルツハイマー病」と言い換えることで、老いに無力な近代合理主義の限界に目をつむる

うとしたのである。

そんな流れのなかで、私に“関係障害としての呆け”論に確信を得させてくれる事件があった。この本の著者、松井俊雄さんの講演を聴いたのである。

当時松井さんは、わが国の民間デイサービスの草分けである「みさと保養所」で、呆け老人の在宅ケアを支える仕事をされており、それに続けとばかりに、川崎市で生まれたばかりの「生活リハビリクラブ」の勉強会に呼ばれて話をされたのである。

彼の話聴いて、世の中には同じことを感じ、同じことを思って、同じことをやっている人がいるものなんだ、と私は驚いてしまった。私は広島の特養老人ホーム、彼は群馬の民間デイケアと、所は違えども、呆け老人は同じ、そしてそれに関わる人間の考えること、やることも同じなのである。

人は個性的に呆ける。個性が数字にならないように、呆けも数字で評価できるものではない。この本には、同じ「生き生きケア選書」の既刊書「よりそってケア」と同じように、個別の老人の個別のエピソードが充満している。そのエピソードを深めることはあっても、アプローチをマニュアル化したりすることはされない。医療の世界の人たちはそれを「普遍性がない」なんて言うかもしれない。個別の老いや生活を“数量化”“普遍化”しようとする近代的思考こそが、老人問題を作り出しているのではないか。医療の出版社から出され、医療の枠を超える1冊である。

● B5判変形 170頁 写真50 イラスト9 1998
定価(本体2,000円+税) 〒400 医学書院・刊